

作法と野蛮：宮澤賢治「紫紺染について」論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17441

作法と野蛮

——宮沢賢治「紫紺染について」論——

小 埜 裕 二

一、はじめに

宮沢賢治「紫紺染について」は生前未発表作品で、原稿執筆時期も不明である。作中に「町の紫紺染研究会」として登場する南部紫根染研究所（大正五年一月創立）の主任技師だった藤田謙の子息藤田勉は、「宮沢賢治は、大正一一（一九二二）年三月に開かれた平和記念東京博覧会に、南部紫根染研究所から出品した紫根染の製品が始めて入賞した事を報道で知り、その感動をこの作品の中に込めたのではないか」と述べ、宮沢賢治が盛岡高等農林学校在学中に「南部紫根染研究所が設立され、高等農林学校は設立に大きく関わっていることから、宮沢賢治も紫根染の復興を間近に見ながら、紫根染の将来に大いに可能性を感じていたのではないか」と述べている。

氏はまた紫根染の再興理由や製法の伝授方法を次のように説明している。「第一次世界大戦により海外からの資源の輸入が困難にな

るとの見通しのもと、国内資源の見直し運動の一環として、南部紫根染復興のことが岩手県知事大津麟平氏の主唱により取り上げられ、南部紫根染研究所が開設されたもので、当時の岩手県勸業課長は筆者の祖父の従兄弟に当たる藤田萬治郎氏で、その様な関係もあって京都で染色の研修中だった草紫堂初代・謙（当時二七才）が主任として招聘され」た。「盛岡にはすでにその技法を伝える人が絶えて居り、明治維新まで藤田家が知行地として鹿角郡柴内村（現鹿角市柴内）を南部家から拝領していた、その様な縁故もあって、秋田県花輪地方（現鹿角市花輪）にかりうじて残って居た、二一代前の祖先から紫根染・茜染を家業として営んで居られた、かなりご高齢の小田切猪太郎氏他一名の方に一年間盛岡に来てもらい、その技法を伝授された。」²⁾

右のとおり、賢治が本作を執筆した時期は、大正一一年に開催された平和記念東京博覧会に出品した紫根染（この染物は一般に「紫根染」と表記されるが、賢治は「紫紺染」と書いている）が「褒状」を得た後の執筆と考えてよい。大正一三年四月から五月にかけて、

賢治は教え子川村俊雄の生計を助けるため、「紫紺染について」の原稿の後半部分を筆写させている。筆写時期に関する川村の記憶が確かなら、本作は大正二三年のこの時期には出来ていたことになる。

だが本作には柳田国男『山の人生』（アサヒグラフ）大正一四年一月〜八月 大正一五年一月刊）の影響も見られるのではないかと。

『山の人生』には、山男が「酒がすきで酒のために働くという話」や、「三合の徳利を携えて、五升の酒を買いに来たという」話が紹介されている。さらに『山の人生』には次のような一節もある。「いわゆるヤマワロ（山童）の非常に力強かつたこと、これはまったく事実であつたらうと認める。そうして怒ると何をするかわからぬというのも、また根拠のある推測であつた。なおまた彼等が驚くべく足が達者だといったのも、通例平地の人々と接することを好まぬ以上は、急いで林木の茂みの中に、避け隠れたとすれば不思議はない。

（中略）不思議はむしろ何かという場合に、かえつて我々に近づくうとする態度の、明瞭に現れていたことである。しかもしばしば不幸なる誤解があつて、人がその真意を酌むことを得ない場合がいかに多かつた。⁵

本作が『山の人生』刊行後の執筆となれば、紫根染が「褒状」を得た感動から本作が書かれたという根拠は薄れる。本作の結末には「紫紺染が東京大博覧会で二等賞をとるまでにはこんな苦心もあつたといふだけのおはなし」という一節がある。「こんな苦心もあつたといふだけ」の「だけ」には、賢治の謙遜の表現以上に、紫紺染の製法を山男から聞き出した人々のありようを通して、ある時代の

もの考えを批判的にとらえる賢治の意識があつたように思われる。「紫紺染について」の先行研究で注目される頓野綾子も本作の批判意識について同様の指摘をしている。「国産奨励運動」の高まりのなかで、紫根染再興が国家主導による運動の一環として「お役人方」を中心に行われた結果、彼らは「徹底して自分たちの側の論理」で山男に接し、「自分たちの目的以外に関心を持つとうとしない」と述べている。頓野は平和記念東京博覧会のことにも触れ、「国家が博覧会という催しに積極的であつたのは、博覧会を、自国の産業を活性化させ富国を築くための国家的事業、として認識していた」からだと述べ、それに応えるように役人達が博覧会に紫紺染を出品することで「国家の基準において評価される「盛岡の産物」の存在を他に見せつけた」と述べている。

殖産興業を国家戦略とする中央の体制に呼応する「お役人方」が、山男のような少数者を疎外して顧みないさまを「こんな苦心もあつたといふだけのお話」という言葉によつて示そうとしたと述べる頓野の指摘は、本作の解釈の基本的枠組みをよく説明している。だが本論考では頓野の枠組みをふまえつつも、明治の近代化が人々に強いた自己中心化の論理だけでなく、当時、世界規模で進展していた帝国主義、植民地主義が人々に与えた序列化階層化の論理のなかで本作を捉えてみたい。この観点から考えたとき作中の「世界の大勢」や「作法」「野蠻」といった言葉の意味がより明らかになると思われるからである。

山男の位置づけも異なる。山男は人間が自分達を中心化するなかで周縁に追いやられた存在というより、階層関係に組み込まれそ

で組み込まれない（大いなる存在）としての山男像を提示する。山男という少数者を疎外していることに気づかない人間の傲慢さや横暴さが山男との関わりを通して特徴づけられると同時に、町の人々とは異なる価値を生きる山男の存在を示すことで、世界の、人間のあるべき関係の結び方、共生の可能性が暗示されていることについて論じていく。最後に、町の人々が山男に強いる「作法」と、「自然」を生きる山男の「作法」を対比させることで、賢治が農学校の教師から農民への転身を図ろうとしていたことについて言及する。

二、博覧会のまなざし

明治時代に開催された博覧会は、殖産興業的な要素が強く、西洋から見た日本へのまなざしに合わせるように、西洋のジャポニズムを意識的に取り入れていた。しかし明治時代後半から日本が国力を増し、帝国主義的な版図拡大を目指すようになってからは、吉見俊哉『博覧会の政治学―まなざしの近代―』⁷が指摘するように、西欧がもった植民地へのまなざしを同時に自国のものにしていく。

大正十一年三月一〇日から七月三一日まで開催された平和記念東京博覧会の会場にも、南洋館や朝鮮館、台湾館、樺太館といった当時の日本の植民地もしくはそれに準ずる地域の建物が建てられた。

一千万人を越える観客が会場を見学し、またそのさまを伝える絵はがき類を通して、さらに多くの人が植民地へのまなざしを学んでいった。そのまなざしとは、序列化の意識や未開を文明化する使命感を正当化する建築物の空間的な布置の視覚化であった。

本作には紫紺染が「東京大博覧会」で「二等賞」をとったと記されるが、平和記念東京博覧会にあつては、殖産興業のために伝統産業を保護奨励していく褒章制度が序列化を促進する有効な装置となつていた。産業を振興するために大規模な範囲で出品作に賞を与えることは、中央政府の權威化をもたらした。中央と地方が、出品作品のランク付けによって、与えるものと与えられるもの、見るものと見られるものの関係をもった。褒賞制度は植民地へのまなざしを別のかたちで表したものであった。

平和記念東京博覧会は、自由、平和を強調する一方で、文化や教育の要素を盛り込み、娯楽性を加味することで民衆を博覧会に大量に誘導し、価値の流通、序列化をはかつていった。それは大正時代の教養主義や文化主義と相まって、物だけではなく、家庭生活や生活スタイル全般にわたる新しい基準、序列化をもたらししていく。この博覧会で観客の注目を集めた文化住宅はその典型である。都会文化が地方に伝播され、なにより良いものなのか近未来の文化生活が示され、それに向かつて生活スタイルを整えていくことが求められた。

こうした序列化階層化の力が働く大きな流れのなかで「紫紺染について」は書かれた。中心化しようとするものは、周縁をつくり出すが、その際に生じるおのれの横暴には気づかない。作中の「会長さん」は山男を招いた懇親会の混乱を見て「世界の大勢」は「実際にどうもこんらんして居る」という。「ひとのものを横合からとる様なことが多い。実にふんがいにたへない。まだ世界は野蠻からぬけない。」とどなるが、会長の憤慨した言葉から読者に送り届けられるテクストの問いは、酒を横合いから手を伸ばしてとる山男と、山

男に冷たい視線を送る役人達の中心化の暴力のどちらが「野蠻」かという問いである。

世界は第一次世界大戦前後、植民地主義のもとで帝国主義的版図を拡大していった。他国の領土を横合いから奪い取ることは日本も同様である。しかし会長がいう「世界は野蠻からぬけない」の「世界」に自分たちを含めていたとは考えにくい。第一次世界大戦勃発後、日本は対独参戦し、山東半島に上陸後、青島を占領し、中国に對する二十一カ条要求を行い、シベリア出兵後も兵を引き上げることとせず、諸外国から非難される。

平和記念東京博覧会においても植民地主義は巧妙に布置されていたが、「ひとのものを横合からとる様なことが多い」状況の下地づくりはその後も周到になされていった。中心化の暴力、植民地主義イデオロギー、帝国主義的領土拡大は、勢いを増していく。朝鮮では天皇信仰を浸透させるために朝鮮神宮が大正一四年に竣工され、後の皇民化政策の布石となった。台湾でも同様の政策がとられた。昭和二年になると第一次山東出兵が行われる。

一方、第一次世界大戦終了後、戦火をまぬがれたアメリカが世界の文化経済の中心地となり、享樂的な大衆文化が日本に浸透していく。中間層の文化や生活意識が変わり、現在の大衆社会状況の萌芽が兆しはじめる。この状況は、大正十二年の関東大震災後の復興とあいまって、モガやモボが東京の巷を闊歩するにいたり、いっそう色濃くなる。享樂的な雰囲気時代を染め、おのれの横暴に気づかない状況をつくっていった。

紫根染は「明治になってからは、西洋からやすいアニリン色素が

どんどんはひつて来」て流行らなくなり、製法が分からなくなっていた。明治以降の近代化西洋化の流れのなかで、すたれた伝統産業は紫根染だけではない。近代化の過程で背後に押しやられたものは、地方であり、地方の中でもとくに山男のようなマイナーな存在であった。西洋／東洋。アニリン染／紫紺染。文明／自然。東京／盛岡。盛岡／西根山。町人／山男。こうした対比構造をもつ物語として「紫紺染について」は描かれている。

都会と地方の二項対立は、中心と周縁の階層関係を形作るが、次には地方の中に周縁化される場所が生じる。それが西根山の山男の場所であった。町の役人や先生は、西洋／東洋、東京／盛岡の構図のなかでは劣勢であるが、盛岡／西根山、町人／山男の二項対立の図式のなかでは優勢である。「お役人方の苦心」は、序列化階層化された社会の中で、自分たちを中心化しようとする苦心であった。「紫紺染」の製法を思い出せない山男に対して「なんだ、紫紺のことも知らない山男など一向用はないこんなやつに酒を吞ませたりしてつまらないことをした」と町の人々が山男を冷たくあしらうのは、その顕著な表れである。

三、作法と野蠻

山男が「知っておくべき日常の作法」という本を買うことも、植民地主義の影響と無縁ではない。大正時代の別の呼び名ともなっている大正教養主義は、教養の重要性を人々に意識させた。文化的規範を身につけることが、身分の相違の重要な記号となった。その結

果、作法が権威の象徴の一つとなり、作法を身につけていることが、支配者の証となった。作法は、支配される側も身につけることが求められた。山男もまた作法を身につけることが周縁化の暴力から免れる方便であると考えような見えない力に取り囲まれていた¹⁰。町の人々は山男が作法をわきまえない存在だと決めつけ、蔑視の対象にしたからである。「こんなやつ」という言葉がそれを示している。山男もまた、「山男の四月」や「祭の晩」の山男のように人間を恐れていたのだろう¹¹。町の人々が山男に注ぐまなざしは、大正期の博覧会で人々が南洋館に注ぐまなざしと同質のものであった。博覧会で周知された文化と、地方で山男が読んでいた作法書は、それらを身につけることが序列化を推進し、序列化に従う意味で共通していた。

山男が山に居つづけるなら、山男は『知っておくべき日常の作法』を読む必要は無かったが、柳田国男が指摘するように、山男がときどきは山を下り、人間との交流を行っていたとするなら¹²、「紫紺染について」の山男も同様に町の人々との交流を願い、酒を求めるために作法を身につける必要があった。

ところで「紫紺染について」の山男は、自然の恵みを大切に暮らしている。かりに山男の言葉の多くが本からの受け売りであるとしても、山の幸は「お日さまがおつくりになるのです」という言葉は本物であろう。自然に従って生きることが、山男の本当の「作法」であった。しかし、山男は人間の前に姿を現すために、もう一つの「作法」を学ぶ必要があった。山男のふるまいを通して露呈してくるのは、山男を招待した中心化の暴力をふるう人間の身勝手な

ありようである。山男の存在は、中心化序列化をたくらむ人間の横柄さ・尊大さを顕在化させる装置の役割を負っていた。

かつてパリ万博は、自然を未開へ、未開を文明へと引き上げる方向で植民地パビリオンを配置したが¹³、本作では、山男は文明以上に価値ある（大きいなる存在）として描かれる。ホミ・バーバは植民地化によって植民地被支配者に生じる変化に注目し、その変化をハイブリディティ（交雑性）という概念を用いて説明した。被支配者は、支配階級の植民者の模倣をするが、模倣は不完全であるゆえに、滑稽感を与え、規範の権威を傷つける結果をうむというものである。山男のふるまいをその角度から捉えることも可能だが、山男の場合には、むしろ人間がもたない価値の方に読者の注意を向けさせる。山男が見せる（大きいなる存在）としての彼の側面は、バーバの言う、ハイブリディティの概念¹⁴の対極にあるものであろう。

柳田国男は山男の存在を征服者によって歴史を奪われたサルタン（従属階級）と捉えたようだが、賢治は、山男を疎外されながらも一方で独自の生き方や能力、価値観を持つものと捉えた。山男は人間の文化と折り合いをつけようとするが、そこからはみだしてしまふ。それは彼のハイブリディティゆえではなく、（大きいなる存在）ゆえである。山男はしかし町の人々を威圧したり、反省させて物語の收拾をはかることはない。また町の人々に玄関で見送られ、町の人々の「作法」の中に再び身をおくこともない。

山男には人間と異なる特殊な能力があった。みんなが山男を見送ろうと玄関まで降りていったときには、山男はもう「七つの森の一番はじめの森に片脚をかけ」ていた。山男のもつ瓢箪には、いくら

でも酒が入った。また「いくらだか分らない大きな札」を持っていた。「手を長くながくのばして」酒のびんを横からとれるような手。手をふとところに入れたまま食事を「舌だけだしてべろりとなめてしまおう」能力。これらの能力は伸縮自在の能力であって、たとえ「知っておくべき日常の作法」を知らなくとも、二項対立の階層関係など簡単に崩してしまえる能力である。

テキストは二項対立の関係を逆転させることを主題とすることも可能であった。「お酒を呑まない」と物を忘れるので丁度みなさんの反対であります」と山男が語る場面から、読み手は山男が酒を飲むと逆転が生じることを予想する。しかし人間との勢力の逆転がテーマになっているわけではない。山男は、自分もつその力で二項対立を逆転させはしない。自分が優勢に立ち、町の人を圧倒しようとはしない。山男が酒を飲み「途方もない声で吼えはじめ」たときに、「みんなはだんだん気味悪くな」る。「ぶるぶるふるへ出した人も」いた。この場面は「よだかの星」のよだかが隠し持った鷹のような力を発揮したときに、周囲の鳥が震え出す場面に似る。だがよだかも自分の能力で相手に勝とうとするのではない。よだかや山男は、ヘゲモニーのための争いをしない。

四、文化の境界線

「紫紺染について」のテキストは、途中の原稿用紙が散逸している。欠けた原稿用紙の直後に始まる一節に「六百からの棄権ですらかな」という言葉がある。この一節は山男から紫紺染の製法を聞き

出すときの会話の一節であるから、紫紺染の研究がはじまった大正五年以降の出来事をふまえたものと考えられる。不景気や社会構造がもたらす貧困問題が取り沙汰され、労働争議が頻発し、ロシア革命に見られる政治的変革によつて体制を変えていこうとする社会主義運動が日本でも力をもちはじめた。当時、国際労働会議への出席者を選挙しようとした中央政府のやり方に不満をもった労働組合が投票を「棄権」した出来事（大正十一年）があったが、右のセリフはこの出来事をふまえたものかも知れない。

あるいは次のことも考えられる。岩手県出身の政治家原敬が内閣総理大臣になるのが大正七年九月で、彼は議会に選挙法改正案を提出し、通過させた。大正九年に衆議院選挙が行われたさい、岩手県の有権者数は約二万人から五万人に増えた。ところが、この選挙は大雨のせいで「棄権」が多かった。新しく編入された有権者の選挙行動をさして「六百からの棄権ですからな」と言った可能性もある。とすれば、この一節は有権者が増えたものの、納税率の低いものが選挙を棄権したその行為をさげすんだ言葉だと理解される。

本作には、「上海」に関する話題も出てくる。同じく原稿用紙が欠損した箇所なので、山男が上海に行ったかどうかはコンテキストからは分からないが、このエピソードも「山男が船に乗って上海に寄つたりするのはあんまりをかしい」と思う人間の見方に力点が置かれている。山男を粗暴で無知だと見下す人間の一方的な見方が批判されていると考えられる。断片であるが、両方のエピソードにはともに相手を見下す意識がある。

「野蠻」な競争が世界中で行われ、中心化しようとするものたち

は権威を保障するために「作法」を流通させた。しかし町の人々は、自分達が「野蠻」であることも、「野蠻」を生みだす社会を変えようとする運動があることにも気づかない。山男と日本人との交流は東の間のもので、酒と紫紺染の情報を「交換」するだけに終わった。語り手がいうように、たしかに「それだけ」の話であった。

しかし「だけ」の言葉を手がかりに読者は賢治の意図を読むことができる。本当の野蠻とは誰か。本当の作法とは何か。そのような問いが本作にはある。野蠻視する町の人々の方が「野蠻」で、野蠻視される山男が「自然」の力を秘めている。植民地を文明化することが正しい道だと考えるのではなく、「自然」なものに価値を見いだす方向で本作は語られている。そうした力がテキストに持ち込まれ、賢治は独自の文化を尊重する力を前面に押し出した。なるほど社会主義的改革が体制を覆す時代の力としてあったが、その方法は「猫の事務所」の結末のように、人々の心の問題を解決することがない意味で、「半分賛成であります」としか言いようのない解決策であった。社会を変革する力を賢治は背後に押しやり、山男の生き方を前面に押し出した。

賢治は海外へ目を向ける同時代人の関心を「博覧会」や「上海」¹⁵という言葉を取り入れることで導きだした。植民地化は世界の文明化に役立つ事業であると主張する役目を博覧会は果たしたが、賢治はそうした日本人の視線を、山男の設定によって大正期の強固な文化的規範の拘束力の中から逸脱する山男の流動性を示すことで、これまでの文化の境界線に対する反省を読み手にうながした。

五、「祭の晩」と共生の可能性

山男が登場する「祭の晩」¹⁶も本作と同工異曲である。「祭の晩」においても、「交換」が解釈のキーワードになっている。祭の晩に山男を助けた亮二少年の家に、山男が過分の礼を置いていく。亮二もまた山男へ「いいもの」を持っていつてやろうと考える。この「交換」には、少年の善意に応える山男の態度、またそれを受けて山男が「とびあがつてよるこぶ」お返しをしたいと言う少年の態度がよく示されている。この二つの「交換」は等価交換ではない。祭の晩に、村人は、団子ふた串と薪百把の「交換」なんてあり得ないと言って山男を笑うが、大人社会の「交換」とはそのようなものである。「紫紺染について」の紫紺染の製法と酒を「交換」した方にも、したたかな人間の計算が働いていた。

「祭の晩」に、賢治は山男を町の人々の前に連れ来たつた。「紫紺染について」においても、山男を人間世界に連れて来た。しかしそれらの場面において、町の人々は山男と交流をもつことなく、関係はそのまま解消される。町の人々は山男を「他者」と認識することさえなかつたわけである。「世界の大勢」を考えるよすがになつたはずなのに、それが出来なかつた人間の愚かさが結末で強調されている。しかしまた、たとえ山男と町の人々との交流が東の間のもので、酒と紫紺染の情報を「交換」するだけに終わったにしても、「だけ」という言葉を手がかりに読者は賢治の意図を読みこむことができる。会長がいう「世界の大勢」の混乱の收拾を考える手だて

を讀者は山男と町の人々の關係を通して反省的に学ぶこともできるわけである。

最後に次のことを指摘しておきたい。山男は「作法」を身につけた町の人々の前に現れた。それは山男が町の人々の暴力をかむすためでもあり、また宥和を示すためでもあった。大いなる力をもちながらも、町の人々の論理にいったん身を寄せようとする。しかし本作では「作法」に従う山男は大事なことを思い出すことができない。

山男本来の「自然」にもどることが山男にとっては大切なことであった。しかし注目したいのは、招待会がおわつたとき、玄関で見送られることなく、山男が姿を消していた点である。山男は町の人々の「作法」の中に再び身を置くことを嫌つたのではあるまいか。

農学校の教師であつた賢治は、大正一四年、山男と同様の年である。「二九歳」となつた。教師として町の人々にあつたとき、賢治が彼等から「若いですな」と言われたこともあつたであろう。山男が町の人々のもとへ行くときに身につけようとした「作法」とは、町の人々に合わせるために賢治がかぶつた仮面の意であつたとも解釈することはできないか。さらに社会生活をするうえで農学校の教師をしていたことも同じ「作法」の一つであつたと考えてよい。山男の存在は町の人々の「野蠻」をあばく結果となつたが、だが一方で、山男がいったん「作法」に身をゆだねたことも確かである。本当の「作法」が「自然」に従うことであるとすれば、この作品は、賢治が農学校をやめて農民になる思いの表明であつたとも解釈できる。農民となつて「自然」のなかで生きることが賢治の本当の「作法」として本作に暗示されていたのかも知れない¹⁷。

賢治の童話では、生あるものは修羅であるがゆえに、他の生き物や自然と共生できないことが多い。中心化を求めた欲望がそれを拒む。それこそが「野蠻」であるが、「野蠻」な人間は自分の「野蠻」を「野蠻」と捉えることなく、山男の素直さを「野蠻」と捉える¹⁸。「正直でかあいさう」と捉えるのは亮二のような子供だけであろう。だが山男は弱いままでは終わらない。物語のなかで共生に関する持続の時間が流れなくとも、讀者が物語の出来事を通じて、中心化する欲望を反省し、周縁のものへの優しさをもつとき、共生の可能性は生まれる。読書行為のなかで讀者に共生の可能性を探らせる物語として賢治童話はある。

自然への回帰というテーマは、もちろんそれほど目新しいものではない。生きものが修羅の地獄を生きざるをえないことを知る賢治にあつては、山男の生き方や子供の無垢は見果てぬ夢の表出であつた。しかし「紫紺染について」を讀んでみると、そこには山男に「作法」を強いる見えない力の問題や「交換」のあり方をめぐむ問題が示されている。相手を力關係において屈伏させず、二項対立の世界からすると身をかむすところに賢治の大事なメッセージを讀みとることもできよう。山男のなりわいが苦しくなり、やがて人間社会へは姿を現さなくなる可能性を讀みとる讀者もいよう。そうであるなら山男の存在はいつそう輝きを増してくる。

注

- 1 「宮澤賢治と紫紺染」 <http://www.icnet.ne.jp/~soshido/>
- 2 「南部紫紺染・南部茜染復興年譜」(一) 南部紫紺染研究所時

代」<http://www.icimnet.jp/~soshido/teikishi/teikishi04-01.html>

3 『平和記念東京博覧会受賞人名録』（大正一一年七月 平和記念東京博覧会発行 四五二頁）によると、「第十三部 染織工業」

「一五二」中の「紫根染」関連で「褒状」を得たものは次の三者である。「紫根染各種 盛岡市新穀街 中村治兵衛」「紫根染 秋田県花輪街 栗山文治郎」「紬紫根染 秋田市大町 那波呉服店」。『平和記念東京博覧会審査報告』（上巻 大正一二年八月）「緒言」（一頁）によると、「本会ノ出品物タルヤ第十七部に互リテ審査ヲ要セシ点数十四万余出品人員七万五千名余ニ就キ審査職員ノ周密厳正ナル調査ヲ経テ名誉大賞牌八十、名誉賞牌百八十一、金牌九百六十、銀牌三千四百九十、銅牌七千九百十三、褒状一万四千五百三十三合計二万六千四百三十七名ノ授賞ヲ行ヘリ」とある。下巻八三三頁には「第十三部 染織工業」の出品数は「各府県及植民地ニ互リ其点数三万三千余出品人員一万千余ノ多キニ及ベリ」とある。この部門で「褒状」を与えられた者の数は私算では二九二名に及ぶ。この博覧会が、一大褒賞制度を備えていたこと、「褒状」が多数の者に与えられていたことが分かる。

4 山内修編著『年表作家読本宮沢賢治』（一九八九年九月 河出書房新書）

5 『山の人生』二六 山男が町に出で来たりし事

6 頓野綾子『紫紺染について』（『解釈と鑑賞』二〇〇一年八月 至文堂）

7 吉見俊哉『博覧会の政治学—まなごしの近代—』（一九九二年

九月 中公新書）

8 新聞報道（『時事新報』大正一一年八月二日）では観客動員数は一一〇三万人を越えたとある。

9 平和記念東京博覧会の絵はがきを見ると、たとえば南洋館と文化住宅が同じ一頁に収まって対比的に捉えられるようになってくる。左図参照。



10

「大正期なかばあたりから公の場におけるマナーが次第に強調されてくる傾向がある。従来はあまり問題にされなかった職場、学校というパブリックな空間でのふるまい方が、注目されてくる。」(熊倉功夫『文化としてのマナー』一九九七年一〇月岩波書店「国民礼法」の成立)

11

「山男の四月」の山男は村に下りていくときは化けないと殺されると思っていた。同じようなことは「祭の晩」の山男にも言える。「紫紺染について」の山男は、人間社会のしきたりという仮面をつけて人間世界にやってくる。三つの作品に描かれた人間は、共通して他者を圧迫し、周縁へと追いやる存在である。山男は米や酒、異性を求めて人交わりをすることを願っていたと柳田国男は『山の人生』のなかで書いている。

12

前掲『博覧会の政治学—まなざしの近代—』

13

ホミ・K、バーバ『文化の場所』(二〇〇五年二月 法政大学出版局)

15

「上海」は、大正八年五月四日に起こった中国のいわゆる五・四運動で注目された都市である。パリ講和会議で中国は二一カ条要求の廃止や各国と結んだ不平等条約の廃止を要求するが認められなかったために、北京の学生たちがデモを開始した運動だが、上海では六月五日、大規模なストライキへと発展していった。

16

『山の人生』に「祭の晩」のモチーフとかかわるエピソードがある。マダの樹の皮を剥いていると、山男が手伝ってくれた。餅をやると、皆食ってしまった。来年もまた来るかと聞かれた

ので、「もうこないと応えると、そんだったら三升の餅をいついつ

の晩に、お前の家の庭へ出しておいてくれ、一年中のマダの皮を持って往ってやるからというので、これもその通りにしてみると翌年は約束の日の夜中に、庭でどしんと大荷物を置く音がした。およそ馬に二駄ほどのマダの皮であったという。それから以後は毎年同じ日に、この家の庭上でいわゆる無言貿易は行

われたのだが、今の主人の若年の頃から、どうしたものか餅は

備えておいても、マダの皮は持って来ぬようになったといっている。」(二〇〇 これは日本文化史の未解決の問題なる事)

17

大正一四年四月一三日杉山若松宛書簡で賢治は次のように書いている。「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけには行きませんから多分は来春はやめてもう本統の百姓になります」

18

「祭の晩」では「正直」という概念が奇妙なねじれをもって用いられている。「あまり正直でかあいそう」というのがそうだ。「正直」がもはや正当な価値として通用しない世の中になっている。正直な者は利用される。「紫紺染について」の山男も同様である。